統一

第百五十號

明治三十年二月二十四日　第三種郵便物認可
明治四十年七月十五日發行　統一第百四十九號　（毎月一回十五日）
四十年八月十五日（毎月一回十五日）發行

發行所　東京淺草區南松山町十五番地（振替貯金口座一二一九番）　統一團

目次

篇章

八、2、佛教の興立を望む所以　本多日生
　　佛教の統一的信仰（完結）　本多日生

諷誦章講義（完結）　阪本日桓
茂原講習會　子老
雜報
教學財團彙報

佛教の興立を望む所以

（茂原講習會發會式に於ける演說の稿本）

1、緒言――2、佛教は活生命を有する事――3、佛教は世界の文化に大關係を有する事――4、佛教は國家の經綸上一日も缺くべからざる事――5、佛教は人格の完成に最大の力を與ふる事

本多日生

1、緒言

この度當地方の有志者、就中各學校教職員方の御盡力に由りまして、佛教を中心としての修養的講習會を開催せらるゝことゝ相成ましたは、實に祝すべきことであります、斯かる催しの起るも單に地方的一時的の要求ではなく、確かに時代の要求將た國民の要求であると思ひますれば、更に大なる歡びに堪へぬ次第であります、予は諸君と倶にこの神聖なる會合に導かれて、佛教の最勝甘露味に浴し佛樹の陰涼に息ひまして、快く清涼の信を養ひ熱惱の塵を拂ふの幸を得ますることを、謹んで發起者諸君に感謝いたします

さて我國民の佛教に對する態度を見まするに、大体三種に分つことが出來るかと思はれます。一は佛教は眞理の上より見れば怪誕不稽、國家の上より見ればその進運を沮害し、個人に取りては迷信を助長して健全なる人格を傷ふ者、その他何れの方面より考察するも有害のものであると見て、之を排斥する一派で、所謂廢佛論者であります。二は佛教は宗教としては高等なるも、元來宗教なるものは方便的のものであつて、文明の發達するに隨ふてその効力を減殺せらるべきものであるか、現今に於て之を排斥すれば、却つて一部信仰者の激昂を買ひ、又それ等の人々をして歸着に迷はしめ、延いて社會の上に惡影響を來たすから、文明進化の自然の發達につれて次第に衰滅するに任かせ、敢へて手を下して排斥するを要せない、又無論その發達興立を期すべきものでもないと云ふやうな意見を懷き居る、一派で之を不問論者とでも名づくべきである。三は前二種の廢佛論、不問論を全然盲目的立論と見て、進んで佛教の眞價を認め、之を擁護してその興立を計

るべしとする、所謂護法論者であります

この三說を考察致しますするに前二說は全く盲目的立論に相違ない、元來廢佛論者は佛敎の何たるかを知らぬ一輩である、不問論者も亦宗敎の何たるか、その社會上國家上若しくは個人の上に如何なる關係を有するかを、吟味しない固陋淺膚の見解に過ぎないのである。元來維新當時に唱へられたる廢佛論の根據には、一種の病見が包まれて居つたのであります、それは皇室と神道、幕府と佛敎と云ふ聯絡を夢想して、勤皇の士は廢佛主義ならざるを得ないやうに思ふて居たので、その獨斷その謬見は一種の滑稽に類して居つたのである。さて第三の護法論の立場にも、うの論旨の內容を細別しますれば、種々に岐かれて居りますけれども、本日は眞理上よりの談道を辿らず、又宗敎的の眞價とも云ふべき信仰的の方面より進まずして、單に價値の方面より論じて見やうと思ふのであります

ヘルバルトは近來の哲學者であつて、復倫理學敎育學の泰斗でありますが、氏か倫理學の根本概念に就いて言ふて居ることは、極めて趣味あることゝ思ふ。氏の說に由れば倫理學の根本概念は、本務と云ふ如な命令的のものでなく、この命令的のものよりは更に根本的のものがある、それはこの命令に先だつて、意志がその命令の價値あるか否かを斷定することであつて、この價値を認むる思想が、その命令を實行することを許すのである、この思想こそ實踐觀念とも云ふべきものであると說くのであります。この說は至極尤もであつて、吾人の實行的動作は道德的の命令よりも、先づ自らうの命令の價値を認めて動くものに相違ない、例へば海水浴に行かんか講習會に行かんかと云ふ二種の行動に就いて、うの動機と實行は何れに傾くかと云ふに、それはその人がその事の價値を認むる實踐觀念の如何に由りて、決せらるべきものであります。この事は佛陀の化導には夙に應用せられて居るので、四諦の說を見ても、苦集滅道と說かれて、先づ迷には現に苦痛の厭ふべく價値なきことを示めし、而して後にこの苦の原因をなして居る處の集を誡められて居る、集とは相

集の義と申して、煩惱の思想と惡業の行爲との二つが、この苦痛の結果を集成するのであるから、先づ苦痛の結果を感せしめて、その原因たるかゝあつめることを止めさせるのであります、滅道と云ふも同じ順序で、悟の結果の寂滅涅槃の眞樂の價値あることを了知せしめてこゝに渴仰を起さしめて、而して後に道諦の八正道を實行せよと、敎へ給ふて居るのであつて、斯く向上向下の兩面の因果を、何れも果を先きに觀せしめて次に因に及ぶの順序を取られたのは、彼のヘルバルトの言ふ、本務の概念より更に根本的なる實踐觀念ありとの說と、趣を同ふして居るのであります。予が本日佛敎に於ける哲學的眞理の談道を辿らず、又宗敎的信仰の旨致より進まずして、こゝに第一着に佛敎の價値を論せんとするものは、諸君が佛敎の議論を知るに止まらずして、興立の動作を實現せられんことを希望するより出たるものと御會得を願ひたい

さて佛敎の實際的價値は大体三方面より認むることが出來るのであります、一、世界の文化に大關係を有する事、二、國家の經綸上一日も欠くべからざる事、三、個人の人格完成に最大の力を與ふる事、この三方面に就いて正明的確の判斷を要することであります

この三方面より價値を遣ふるが演題の主旨でありますが、本論に入るに先たつて佛敎は活ける宗敎である事を少しく談りたいのであります

二、佛敎は活ける宗敎なり

佛敎が活きて居ると云ふは形容詞ではない、有機的生命を有つて居ると云ふのである、彼の社會學に於て、社會は一貫せる目的を有し、又精神的作用を有して生命ある有機的團結であると云ふが如に、佛敎も一貫せる目的を有して、又精神的作用を持續して居る所の、有機的團結であつて、即ち生命を有して活潑として生きて居るのであります

佛敎を認めて死せる文字の經典を墨守するものと思考するは、大なる謬見である、又幾多の形式に拘泥してその本質を認めないものは、卑むべき淺見である。經典は尊重すべき敎訓に相違ない、形式は宗敎に伴ふ必

然の儀禮に相違ないが、その儀禮を生じ來る根本的のものがなくてはならぬ、その經典の聖訓を至れたる根本的のものがあつて、又その聖訓の目的たる實際的のものがなくてはならぬ、この根本的實際的のものを逸しての經典崇拜や儀禮の死守は、一たびは清められ新たにせられねばならん運命に際會して居るのである。その根本的のものとは何ぞ、即ち佛陀と衆生とであります、その實際的のものとは何ぞ　吾人々類がそれであります、廣く眼を放つて物理界を視れば、物質には固定性と變化性とありまして、この兩性が即ち物質である、之を單に固定性の一面に見るは謬見であらう、之を心理に見るも、不生滅の心体と生々變化の心象とを束ねて心と見るべく、又之を實在の本体に就いて考ふるも、動靜二面ありて單に靜の一面を本体とし動の方面を現象と見るは、決して透徹の見とは云はれない、本体そのものが動靜二面を包有するので、動即本体である、緣起即實相である。又佛陀の智見は如何なるものぞと云ふに、是れ亦權實の二智が併有されてあつて、不變の理を照すは實智、隨緣の事を照すは權智でありますが、實智が權智よりも貴しとは申されませぬ、寧ろ實際的化用の妙はこの權智即ち順應の妙作用に存するとも云はれて居る、この二智の顯はれが佛教の教訓であつて見れば、佛教は根本的に實智より來れる不變の大道と、又權智より來れるその機根や時代に順應攝化を與ふる變化の作用とを、併せ有つて居るものであつて、この不變性と變化性とを併せて佛教と見るべきである、その何れかの一方を認めないのは、恰も物理に不滅の物質と活動的の勢力とを認めず、心理に不生滅の心体と變化性の作用とを認めず、實在と動靜二面を非認するが如なものではあるまいか

斯く見來る時は、佛教の原理も活物であり、佛陀は固より活物であり、その妙用は活作用であつて、その活作用が教義として傳はるものとすれば、こゝに佛教は活けるものであることが、會得せられるではありませんか

已上は佛教を客觀的に見て、その活けることを論じたのであります、實は佛教は單に客觀的のものではない、主觀的に吾人の心靈と關聯して、その上に成立し存續して居るので、佛教は畢竟この客觀の佛陀と主觀の心靈との橋梁であり又連鎖である、この佛陀と吾人との協同の上に佛教は成立し存續して居るもので、吾人と全然關係を離しては、そこに佛教は成立もせず、存續もしないものであらうと思ふ、そこで佛陀の方には權實の二智ありて四悉檀の化を布くと申して、世人に對し時代と機類とを見て適應を示され、又その除くべき病弊は之を對治し、而して第一義の要諦を教へ、斯くて示し教へ利し喜ばしめ玉ふが佛教で、この示と教と利と喜とを含めるものを一括して教の字で顯はして居るのであるから、利と喜とを去つて、單に示と教とでは死せる宗教となるかも知れぬが、利と喜とを併有せる佛教は、そこに順應作用を有つて居るから時代や機根の變化に依りて、死すべきものでない。又之を吾人心靈の方より見ますれば、その佛陀に接觸すべき橋梁をば、己れの渡り得べき適當の地點に認めんとするので、それは渴仰より來る必然的の精神作用であつてその接觸點を撰擇することに於て、佛教の活作用を發揮し持續して行くものであらうと思ふ。佛教とは、この下にある吾人心靈の活ける欲求と、上より來る佛陀の慈愍善權の攝化との結合の上に成立し存續するものであるから、斯く佛陀の不變の證悟と活作用と、吾人の不變の佛性と渴仰の活作用との、結合によりて存在せるものとすれば、佛教は不變の大道と活潑たる生命とを有して、永遠に生き働いて居るものであることが會得せらるゝではありませんか

大槃涅槃經（卷三十七）に說けるあり、「我れ世と諍はず、世法のために沾汙されざること優鉢羅華の如くならん」と、佛陀は世と諍ひ給はず、即ち時代の思想と國風方俗とに對して尤も溫かき同情をもつて、その思想の根底に下りて、之に順應を試み給ふのである、されどその順應の作用は畢竟之を啓發して向上せしめんがための調御であるから、佛陀は決して世法に汚され給はず而かもその接觸を取りて向上せしめ濟度し給ふので、

その有様が泥を離れざる蓮の清新なる華を開くが如てあるから、「我れ世と諍はず世法に沾汙されざること優鉢羅華の如し」と說かせられたのであります。この世と諍はざる順應啓發の妙用が、佛陀の智悲海より出て、吾人の心靈に響きを傳へたのが、それが佛敎であるから、この活作用と活反響とが永へに展轉呼應して、そこに佛敎の活生命を存續し發展し來たつたのである

龍樹論師（大智度論）の曰く、「法施とは經法に歸依して、廣く義理を作り、爲めに名字を立つるを、皆法施と名く」と、佛敎宣傳の活作用は、その根底は經法に依附するも、異なれる時代と邦國との間に於ては、廣く義理を作つてその義理に名字を立て以て、佛敎の活感化を試むるが、それが眞の法施であつて、即ち佛敎の眞の傳道であると喝破し給ふて居る

智者大師（大智度論）の曰く「經を通じ法を說くことは時事の所宜を觀て、義を作り名を立つるに、亦何の失か有らん、寧ろ株を守つて兎を待ち必らず斯の責を貽すべけんや、且佛敎は無窮なること恆沙も譬にあらず東流の者萬の一にも達せず、智人君子希くは更らに詮せよ焉」と、この活釋を拜して徐ろに佛敎の活作用を考へますれば、前來述べ來れる如に、佛敎は不變の大道と變化の作用との上に、活生命を有つて居るもので、今日の如き思想界の大開展を來たす時に當りましては、特に盛んにその活作用を起しつゝあることが瞭々として認めらるゝてはありませんか

3、佛敎は世界の文化に大關係を有する事

これより本論に入つて、佛敎は世界の文化に大關係を有する事を述べることに致します、現代及び將來に於きまして、世界の文化の最大の希望は何でありますか先づ之を哲學上に就いて考へますれば、知識と信仰との調和結合ではありませんか、即ち吾人人類の性情である知情意の何れにも滿足を與ふること、約言すれば人類全体の全要求に答ふべき最高最大なる原理の發見ではありませんか、この最高最大の原理に新たなる体系を取り組織を示すことてはありませんか、さてこの

希望は即ち哲學と宗敎とを一致せしめ結合せしむるに外ならぬのであります、これ實に現代及び將來に於ける世界文化の上に懸れる最大の希望であります、この希望と佛敎とは何等の關係を有たぬものであらうか、將た關係を有つて居るであらうかと考へますするに、佛敎の本質實体は全くこの希望に大關係を有つて居る、否寧ろこの希望を滿たすべき五百由旬の寶渚が佛敎である、三乘等しく運載せらるべき大白牛車が佛敎である、由來佛敎は哲學面の眞理と宗敎面の佛陀とを併有する大宗敎でありまして、哲學面には涅槃論ありて、之に實相緣起の二面を闡明して、知的欲求に答へ、宗敎面には佛陀論ありて、之に有限的莊嚴身と絕待的法色身とを開示して、信的欲求に答へ、而してこの涅槃と佛陀との一致合体を示して、ここに信知を統合せる妙信を勸發し來り、横には有智無智の兩機を攝し、縱には吾人性情の全要求を滿たす所の、尊無過上の大宗敎でありますから、前に云ふ佛敎本來の統一的作用と順應的作用とに顧みますれば、この佛敎の活解釋活發展の下にこの文明の最大希望を滿足せしむることが認めらるゝのであります。かく佛敎が眞乎絕大なる價値を包藏して居ることが會得せられたならば、之が興立を翼贊することのそれが、即ち世界の文化に對する最大貢献であることも併せて會得せらるべきではありませんか

近來一部の人士に於ては、甚だしく知識を蔑視し拒斥して、直覺的の信仰の上に宗敎の基礎を築かんとして喃々するものがある、されどこれは餘りに偏傾せる思想であつて、決して健全の信仰とは言はれない。元來人類は合理性の活物であつて、信仰に依りて知識を侮蔑せらるゝことを快しとせないのみならず、必らず何等かの批判の上に立つて之を破壞せんと試むるであらう、故に萬人を普濟すべき宗敎として、又人性の全欲求を滿たすべき宗敎としては、能ふだけ合理的であつて能ふだけ思想の方式を尊重する上に立つて、而かも渴仰の泉を湛へ得る底の宗敎でなくてはならぬ

又一部の人士は、實在問題が容易に人智の商量にては

不可能なるとに失望して、平凡主義を唱へて、理想なく趣味なき人生を送らんとするものがある、これも方面を異にせる極端の思想であつて、決して健全とは許されぬ、最早今代に在りては、物理學の研究よりするも、心理學の研究よりするも、將た又た社會學の研究よりするも、人生には不滅の觀念を基礎として、何等かの實在を認めねば、人格の完成も社會の向上も望まれないことが明かになつて來て、そこに宗教的信仰を要することは爭はれぬことになつて居るのである。如何に偏傾せる思想を鼓吹するものがあつても、世界文明の大勢は、堂々として秩序よく智識と信仰との背馳を捨てゝ、うの併行より進んで合一を期せんとして居ることが明かである、さればこの健全なる世界の堂々たる大勢的希望に答ふべき最大の宗教としては、唯獨り佛陀の聖教が備へられて居るのであります

更に之を倫理學上の趨勢と希望とに對して考察致しますれば、近代に於ける倫理學上の趨勢は、確かに他律的若しくは强制的の道義を捨てゝ、自發的でなければならぬこと則ち內合的目的論であつて、我に稟乎たる目的を有して之を果たすべく努力するのであります、又消極的退嬰的の道義を捨てゝ、活動的積極的の道義を尊重し、之を活動主義と稱して居るのであります、即ち道德の行爲は義務として强壓的に行はしめらるゝ命令的のものでなく、己れに有する自我を發展するために活動し努力し、而して人格の完成を期するのである、且つ又た個人的の道義に安んぜずして、社會的の道義を尊重することに移つて居るのであります。即ち集合團體の上に於て、低き生活狀態より引き上げて、高き生活狀態に向上せしむることに貢獻するの行爲、それが尊重すべき道義であると唱道されて居ります。要するに個人としては自我發展の上に人格の完成を期し、社會に對してはその向上進步に貢獻することが道德の神髓であります、さて斯かる主義は佛教と何等の關係を有たぬてありましやうか、苟めにも佛教の教義に指を染めた人は、佛教に吾人が佛性を具へ有てることを教へ、又菩薩行を奬勵せられてあることを學ぶて

あらう、この佛性とは倫理學上云ふ自我の最も完全なる意義である、又菩薩行は化他の行と申して社會のために貢獻する努力であります、又佛教には不放逸行と申して、懶惰怠慢を誡めて努力奮迅すべきことを教へられ、勇猛精進と申して、意志の剛健と不屈とを奬勵せられてある、之に由つて考察しますれば、近代倫理學上の主義は、悉く佛教教義の一側半面を開拓して之に接近しつゝあるものと見てよいのであつて、又その倫理の實行力なるものは、宗教的の感化信仰に俟つの大なることも、今日にては異論なき所であつて見ますれば、佛教が倫理學的に社會の文明に對して如何に重大なる關係を有つて居るかは明かで、この佛教の興立を計ること、それがやがて道德の奬勵發揮に貢獻するものであることが、了知せらるゝてはありませんか

更らに又之を教育學上より對照して考察致しますれば、今日の教育學は始んぞ心理學の研究よりもたらせる材料と、倫理學上の材料とを基礎として、その上に建設せられたるものゝやうに思はれます、うれは心理學に於ける知情意の完全發達則ち人格完成を取つて、之を實際に仕揚げることが教育の一面の目的であつてその他面には倫理學上より來たる社會性を完成することである、心理學上言ふ人格の核は、倫理學に言ふ自我である、而してこの自我發展が個人性の教育の目的であるとすれば、この教育の主義より見來るに、佛教の教義、感化、信仰、實踐が教育に如何なる關係を有して、文化を完成するに如何の地位を占むるか、又この佛教を興立するそれが、文化賛養の活事業であることも、一々詳述を要せないことゝ信ずるのである

更らに更らに復之を歷史上より考察せば如何、歷史は實に社會の生命であり又文化の基礎であります、歷史なき國家と人民は沙漠の生活と同じであつて、そこに何等意義なく趣味なく將た生氣を有たぬであらう、然るに佛教が世界文明史上に占むる地位は如何、實に文明史上最大の色彩を放てるものではありませんか、就中東洋の花、亞細亞の光ではありませんか

終りに美術の上より考察致しますれば、美術は個人に

於ては理性と感性との調和をなさしめ、社會に對しては貧富上下等の階級を超へて、うこに調和融合の情致を起し、又宇宙に取りては人生と自然との矛盾を諧和して適應の妙を得せしむるものであるが、この美術と佛教とは何等交渉する所なきか、否、佛教は美術を發展し奬勵したる最大原動力であつて、又その最終の目的を達せしむるものである、若し佛教の如き崇高絶妙の理想を捨てゝ復何の美術に價値を存するか、又美術の終局は之を人格化して美の神、美の宗教となつて始めて完全に個人の性情を調和し、社會と自然との間にも調和の實を擧ぐることが出來るのである、若しも佛教を美術より除去せば、その發展の原動力とその最終の目的とに於て失ふ所は、實に甚大なるものであらう、少なくとも東洋の美術はその生命を失ふてあらう斯く各方面より考察致しますするに、佛教が世界の文化に大關係を有する事、隨つて佛教の興立を策するは、取りも直さず文明に貢献する活事業であることが、大体會得せられたことゝ信じます

4、佛教は國家の經綸上一日も欠くべからざる事

第二に佛教は國家の經綸上一日も欠くべからざる事に就いて述べます、國家觀念するものは何かと云へば即ち歴史觀念であります、歴史を除き去つては、そこに國家觀念は培養せらるべきものではありません、さて我國の歴史上に佛教は何等の關係を有たぬてありましやうか、如何に反佛教的の思想を懷く人でも、佛教が我國の歴史に關係を有たぬとは申されまい、否我歴史中の尤も廣き範圍と有力の方面に大關係を有つて居つて、それが極めて能く消化し同化せられ又順應せられて、こゝに國風民情の骨となり髓となり血となり肉となり皮となりて居るのであります、今にして佛教を顧みないのは、恰も自己の身体を顧みないと同一の痴態と云はねばならぬ、されば國家觀念が國家經綸の神髓中樞であるとすれば、そこに佛教の興立を必とすることも説明せられて居るのである

又我國の國家的道德としては忠孝の倫理を生命とし、

その忠孝の中にも一旦緩急あれば義勇公に奉じて死を鴻毛の輕きに比する底の信念を、堅守せしめんとするのであるが、この國家的道德と調和し一致する宗教を興立するが、即ち國家經綸の要諦ではあるまいか、果して然りとするならば、佛教は順應的活作用の上に俗諦開會と稱して、世間の倫常を尊重し、又隨方毘尼と稱して、その國風民情を推讃し、こゝに我國家的道德を鼓舞し作興する所の活宗教である、更らに佛教に教ゆる因緣觀は、その生れ出てたる生國の因緣を尊重し、又四恩の德化は、その國王の恩を敬へて宗教的信仰の上安心の上に奉國盡忠の大義に殉せしむるのである、斯かる我國に最適切の宗教を興立せずして、何の經綸をか語らんやであると思ふ、達識具眼の士は説明已上に、佛教興立の直接國家的活事業たることを、神會せらるゝことゝ思ふ

又我國建國の体を見るに正しく宗教的建國である、武を以て國を建つとは第二義門と申さねばならぬ、何んとなれば我國は德を以て國を建て、その德は六合照臨の神德であつて、全く宗教的建國である、天津日嗣の尊號は宗教的建國であることを證して餘りありと信ずさてこの宗教的建國の我大日本は、この建國の要諦を尊重し保護することに於て、經綸の根本義を築かねばならぬ、近來の思想界には、隱約の間に我建國の記錄を以て、一種の神話として、拒斥するものが少なからぬやうであるが、是れ大なる謬見である、神話は神話としても爾かく無意味のものでない、凡そ哲學にまれ宗教にまれ、將た百般の學科にもせよ、その原始は神話に胚胎せざるものはないとは、近時學者の等しく唱ふる所でないか、その神話は神話として、それに適當なる意義を開展して、その神話の内に包まれて居る不磨の眞理を存續し助長せねばならぬ、されどこれは一大難事であつて、尋常學者の徒の能ふ所ではない、之れは大なる哲學者しくは宗教の解決に俟つの外はないのである、而かるに幸なる哉我國に弘まれる佛教は、彼の順應的活作用の上に、この建國の意義を最も嚴肅に且つ合理的に解釋して、こゝに無限の神聖と活力と

を擁護し存續し來たつたのである、聖德太子が佛教は神史の玄幽を說くと、憲法に示めされたることは、眞に活眼達識の致す所と轉た敬服に堪へぬ次第であります、この建國の狀態に對する國民の思想を、明斷に健全ならしむることが、經國の一要諦であるとすれば、そこに佛教の興立を希圖することが、直接國家的活事業であることも會得せらるゝと思ふ

又西歐の物質的文明を採用せる我國は、こゝに權利利益の思想の勃興に伴ふ弊害、その著明なるものは社會主義の蜂起であります、今日は未だその萌芽に過ぎないが、年を遂ふてその勢焰を高め來たるものとせねばならぬ、この急激なる衝突を調和し、その他之に均しき社會百般の不平煩悶を緩和し、上下貴賤をして何れも滿足と和氣との間に秩序ある進歩を見んとならば之を導く根本的方針が立たねばなるまい、この要求に答ふるものは復實に佛教であります、佛教の感化に依れば、富貴の者は衆生恩の大義と慈悲の本旨とを以て念とし、そこに下民に對する尊敬と歡恤とを拂ひ、又貧賤者は因緣說の感化に於て、上下の隔絕を無意味に嫉視し、怨恨し、煩悶することなく、その分に安んじてそこに滿足と平和とを維持することが出來るから、この不平、衝突、危險を除いて平和、秩序、進歩の光を仰ぐことが得らるゝのである、かゝる緊要なる活作用ある佛教の興立を策するを指して、閑人の閑事業と言はれましやうか

特に我帝國は發展的機運に際しまして、今後ます〳〵國民の勇健努力を要するのでありますから、佛子日蓮の唱へたる如き剛健活動の宗教を興立すべきであらうと思ふ

上人語あり

我れ日本の柱とならん、と

5、佛教は個人の人格完成に最大の力を與ふる事

第三に佛教は個人の人格完成に最大の力を與ふる事に就いて一言致します、人格完成に最緊要のものは目的觀と現在の滿足とであります、若しも目的の觀念が正

明でなく廣大でなかつたならば、到底人格の修養を進めて行くことは出來ない、又目的に心奪はれて、それに達することが容易でないからと思ふて、失望するやうては、決して修養は積まれるものでない、それであるから一歩は滿足の地に安立し、一歩は目的の地に進取して行かねばならぬ、この目的觀と滿足心とを併有するには、それより先きに一大自覺を要するのである、それは何かと云へば吾人の理想と現實の事實とは、容易に一致しない必らず矛盾して居る、所謂佛教の求不得苦即ち理想に求むることは現實に得られない、この不完全なる人生を大觀して絕大の大目的を定むると同時に、その目的を遂ぐるに就いての安立の地歩を發見せねばならぬ、この自覺はやがて宗教的信仰に接着して、始めてこゝに慰安の地と大目的の確立を見るのであります、更らに他面より考へますれば、知情意の調和發達であつて、知力はます〳〵鮮明に正確に發展せられ、情緒はます〳〵崇高淨潔に進み行き、意志はます〳〵剛健不撓の意氣を發はれて、そこに人格の圓滿が得らるゝのであります、この人格完成の要件である自覺と云ひ、目的觀と云ひ、滿足心と云ひ、又他面に於ける知情意の調和的發達と云ふが如のことは、佛教に由りて極めて適切に與へらるゝのであります、それは佛教の信仰論と、倫理論とを述べますれば、いよ〳〵鮮明に會得せらるゝのでありますが、何れ講習中の課題として、その邊をも講述する考であります、今は略して置きます

法華經の開經に云く

生死に出入すれども怖畏の想を生せず。諸の衆生に於て憐愍の心を生じ、一切の法に於て勇健の想を得ること、壯なる力士の諸有ゆる重き者を能く擔ひ能く持つが如し、と

この一聖諦の中にも、佛教が人格の修養に與ふる力の甚大なることが認めらるゝのであります

前來述べ來れる如に、佛教は活宗教であつて、世界の文化に大關係を有し、國家の經綸上一日も缺くべからざる要素であり、又人格完成に最大の力を與ふるもの

てあります、この絶大なる價値を認むるならば、佛教の興立を望むは所以なきにあらざることが分明すると信じます、何卒諸君は斯かる意義に於ても、佛教の興立を翼賛あらんことを切に念願致します　（完）

正法を宣揚するは、人中の最勝事なり（阿育王碑文）
正法を護持する因緣を以て、この金剛の身を得たり（大涅槃經）
第子一佛の子と生まれて諸經の王に事ふ、何んぞ佛法の衰微を見て、心情の衰怠を起さゝらん（立正安國論）

八、行法篇　2、信仰

佛教の統一的信仰（承前）

本多日生講演
増田晉道速記

さて佛教徒の信仰は、三寶に歸依するを指して具足の信と名くるのであるが、その三寶の中心は、本佛釋尊であつて、信行唯一の依止處歸敬處をこゝに定むべきであることは、大略前に述べ了はりましたが、この三寶具足の對象をば吾祖日蓮上人は本尊として示し給ひ、而してその意義を子細に說き教へ給ふのである。幾多の佛陀諸天善神等ありて、殆んど散漫の如に思はるゝ佛教の教義も、吾祖の教へより見來たる時は、悉く本佛の應現として、こゝに統一を認めらるゝのであつて、この統一的の本佛とその無邊の應現とを綜めて、即ち一個の体用不二の佛陀と信じ上つる時は、この教義この信仰は、極めて大なる包容力となり、同化力となり、又順應作用を起すのである。元來佛教はこの統一的本佛觀の立脚地に立てる宗教であつて、諸神界の統一を宣明したのである、即ち印度に在りては、波羅門教徒の信仰對象として崇拜せりし梵天帝釋等の諸神を包容し同化せしめ、又順應的の教義を示して護法の善神と稱し、佛陀はこれ等諸神を攝化して天中天の寶座に立ち給ひ、進んでこれ等諸神の小なる擁護は佛陀の妙用の一支派であつて、大慈悲海中の一滴水に外ならぬと教へて、還元統一の旨致を明かし給ひ、又支那に入りては、聖賢の教訓をば包容し同化せしめて、之に順應の教義を示めし、孔孟等の諸子も佛陀慈化中の

妙用に外ならずして、その人道倫理の教訓は、佛陀大教の前方便に屬すとなし、こゝに前驅後啓の說を立て、我日本に入るに及んでは、建國の祖として崇拜せる幾多の神明を崇敬して、能く之を包容し同化し、順應的の教義を發展して本地垂迹の說となり、新くて幾多の小なる神明を還元し幾多の小なる信仰を淘冶して、之を統一的本佛と統一的信仰の下に融合せしめたのである。この佛教の包容力と同化力と順應作用とを有すること、及び三國に經來れる史實に徴するならば、他日西國の天地に我佛教の傳播せられて耶蘇教との接觸を試むるの日は、又この活力を打開して彼等の信仰とその對象とを包容し同化せしめ、又内よりは順應的作用を起して、こゝに我統一的本佛の妙用中に統攝せられ終ることも、敢へて推知し難きことではないと思ふ、彼等耶蘇教徒は信仰の前には柔順なれ憍慢を去れと口々に言ふて居るが、單に情緒の上に建つる信仰は、人類思想の發展に伴ふて決して最後の歸着を占むることは出來ぬと思ふ、今日の處知力の恃み難き點あるより、その一面に突入し來りて情緒の信仰を唱ふる傾向が見へるが、是れも一時の現象のみであつて、吾人の類の性情は常に合理的たらんと欲求し、又滿足を得んと欲求す、合理的たらんとすれば滿足を得ず、滿足を得んとすれば合理的なる能はずとは、彼等信仰の聲であるが、之れ人類半面の欲求を捨てゝ半面の欲求に安んせんとするものであつて、決して全欲求を充足せしむるに足らぬと思ふ、されば必らず全欲求を滿たすべく更に新たなる勇氣を鼓して思想界の大發展をもたらし來るの日あるべく、その時は、我佛教の信知合一の妙信に對して拜跪し來るは、智者を待つて後に知るべきにあらずと思ふ

本佛無限の妙用より來る應現は、小なる神格として顯はるゝのみでない、又聖賢哲人としても現はるゝのであり、又時に凡庸の人にも現はれ給ふのである、又たその人の生涯を通じてでなくとも、その人の思想の中に一時的に若しくは永久的に現はれ來ることもある、その現はるゝは如何なる凡人にも必らず佛性と云ふい

と尊とき性能を具へ有つて居るから、この佛性の緣を逐ふてそこに本佛は來臨影響し給ふのである、故に嫉妬多かりし婦人の心に慈悲同情の心の湧く時、そこに眞の佛は來り給ふ、憍慢强かりし俗士の心に大慈渴仰の心の動く時、そこに眞の佛は座し給ふ、斯くてこの慈悲同情の善女の働く處、大慈渴仰の信士の戰ふ處にやがて眞の佛の妙用を認めらるゝのであつて、之を佛子如來事を行ずとも、菩薩所行處とも云ふのであるされば凡人に於て如來事を行じ菩薩行を行ずる一時的若しくは永久的の動作も、皆眞の佛の妙用妙力の感應でないものはありません

この眞の佛の妙用は斯く應現し給ふのみでない、罪を救ひ福を與へ給ふ、濟度の力をも有つて居らるゝのである、その眞の佛の妙力は上より來りて濟度の光となり、又その聖敎は下に我等の罪に就いての論しを與へて、安立の地を定め給ふのである、眞の佛の妙力は何より生ずるかと云ふに、佛は一切知見を成就し給ふて妙理妙法悉く之を運用し給ふ上に、大慈大悲の御心は常に慈善根の作用を起して、そこに無邊廣大の功德を成辦し給ふて居る、斯くて妙智は妙理を運用し、大慈は妙智を推き、功德は大慈の活動を結晶して潛勢力と成り、その必要あるに際しては、こゝに濟度の活動力となりて、我等の上に下り來るのである、之を一括して佛力と稱し、佛力不可思議と讚歎するのであります、又その聖敎に照されて、罪の本性を見れば、そこに無罪相懺悔の妙義あり、この無罪相懺悔と云ふは、罪をば吟味するに、元來吾々が本具の性情中に於てその發動作用を謬りたるに過ぎないから、秩序を失へる作用と云ふに外ならぬから、之に向つてその秩序を回復せしむれば、罪その者も元來吾々より切り捨つることの出來ぬ本具のものであつて、恰も澁柿の澁味は外より來るにあらず、又之を取り除き去りては甘美を生ずる原料を失ふから、但この澁味に時を與へて溫釀ずれば、一夜にして澁そのまゝが甘味と變ずるが樣に、我煩惱惡業の罪は內に佛性の甘味を含んで居るから、信仰の心に促されて外に眞の佛の感應を求め、無

邊廣大の功德力に由りて溫めらるゝならば、內外感應不思議の因緣を以ての故に、即時に一切の罪業を轉じて無垢淸淨の佛子と成ることが許されるのである、要は眞の佛に對してその功德力を渴仰し上りその聖敎を指針として我等が罪の本性を洞見し、內在の佛性を喚起すべきである、その佛性の喚發は一に佛陀を渴仰する妙信に由りて得らるゝのであります

水に月の影の入りぬれば水の淸さが如く、御心の水に敎主釋尊の月の影の入り給ふか、（錄四五〇、松野抄）

釋迦牟尼佛と大乘經典に向ひ上つて復是の言を說け、我れ今懺する所の眼根の重罪、障蔽穢濁にして盲にして見る所なし、願くは佛大慈をもつて哀愍し覆護し給へ

（錄四〇、結經）

眞の佛と聖敎とに依れば、如何なる罪業深き輩も濟度せられぬとはない、彼の提婆が五逆を犯せしも成佛を許され、女人が法器にあらずとせられしも無垢の證を示めし、闍王の大罪すら月愛の光には淸められたてはないか

佛の聖敎に導かるゝ者は至幸の人である、必らず濟度の惠を被らない者はないのである、而してその濟度は涅槃の悟を與ふると俱に、直ちに人世に道德的の力と光とを與へ給ふのであつて、個人としては人格を完成して、又社會をば調和の內に高き生活に導くのである

その好範としては吾日蓮上人其の人を見るがよいと思ふ、凡そ人格上の美德としての詞は、之に日蓮の二文字を冠する時、躍然として踊り肅然襟を正さしむるものがあるてはないか、見よ—日蓮の熱誠—日蓮の自覺日蓮の活動—日蓮の奮鬪—日蓮の信仰—日蓮の抱負—日蓮の慈悲—日蓮の操守—日蓮の道念法喜—日蓮の潤達剛毅—日蓮の淨潔秀麗—これ等人格上只その一を有しても以て萬世に師表たるべきもの、然るにこの諸高德を凡べて併有せられて居るのであつて、而してその一つ一つが特殊の光と力とを示して居るてはないか、この上人の高德は何れより得られたかと云ふに、佛陀の聖敎に導かれて佛陀の力を享け得られたからであります、一言にして之を言へば佛敎信仰の力であります

この佛教の經典に就いて少しく述べて置きたいことがあります、元來經典は形式的に崇拜するために起つたのではない、之を精神に消化して信仰の力とし光とするのであり、而してその信仰の針路を示すものであります、經典の示す所は信仰に力を得せしむるので、その力は主として勇健の思想として現はれて居る、則ち重荷を負ふて險阪を越ゆるの力であります、日本婦人は淑德温良の美德は遺憾なく發達して居る樣でありますが、この勇健の思想が乏しくはないでしやうか、日蓮上人當時の事を思ふと、池上氏の妻は十三の小女を携へて佐渡が島に上人を訪ひ、且つこの一小女を留めて上人のためにひそかに御用を辨じさせやうとしたのである。當時の佐島は容易に婦人の渡り得べき所でないが、武藏の池上より佐渡が島に音訪れなさつたのみならず、我娘の十三にしかならぬ子をして、上人のために盡さしめんとせられたことを思ひますれば、うの勇健の振舞に對して轉た敬慕に堪へぬではありませんか、これは妙經の中より與ふる信仰の力であつて、又上人の人格より來りし感化の力であります、何れにしても眞の佛教は形式的の信仰をもつて滿足すべきものでない、この活火ある信仰を經典の内よりも、佛陀の上よりも、上人の上よりも、喚發し來るが尤も大切のことであります、されば法華經の開經十功德品の中には、この經の利益は力であることが示されて居ります、即ち十種の功德不思議の力ありと說かれて、この十種の第一の力を見ましてもその中に十七種の活力が現はれて居ります、この活力が上は涅槃菩提を得る力となり、下は人世の道德と實踐する力となるのである、この人生の光と成ると力と成る生命活力を有たぬ信仰は、決して佛教の眞の信仰とは申されませぬ開經の聖教を拜しますれば、(1)この經は未だ發心せざる者に菩提の心を發さしむとあつて　この發心と云ふは則ち自覺であります、如何に自覺するかと云ふに、自己に本來佛性を有ちながら煩惱のために覆はれて無明の闇を迴りつゝ出離の緣を得ざりしものが、今は佛陀の導きに依りてその廣大なる妙力の下に我佛性の光

顯をなすべき時の至れることを自覺致しまして、この自覺の歡びが如何なる希望にも立ち勝される大願即ち無上の妙覺を得ることを決定し、こゝに凡べての熱惱を拂ふて滿足の心に充たさるゝに至るを云ふのであります、この自覺が尤も鮮明に意識せられて全意識の中樞となり統覺となつて、凡べての思想行爲を指揮し奬勵する力となるのである、是れ即ち發心是れ即ち信仰である、この發心信仰の力は次て幾多の道德的作用を續發するものであるから、經に(2)慈しみ仁みの心のなかりし者は慈の心を起すことゝなり、(3)殺戮を好みて殘忍の性質であつた人も大悲の心を起すことゝなり(4)嫉妬多かりし人則ち他の善事を見て之を惡み妨げんとするやうのものが、轉じて他の善事に同情を寄せ隨喜するようになり、(5)愛著の心强くしてために煩悶せりしものも、諦めよき人となりて割愛の心は能くその事を思ひ切るやうになり、(6)慳貪にして善に施すことを知らず利己心にのみ驅られて居つた人も慈善布施の心を起すことゝなり、(7)憍慢多くして我が知識に憍り權力地位名門の等ことに侵心を懷いて正善の道に進むことの出來なかつた人々も、謙讓の心敬虔の心信頼の心を起してそこに德を以て生命とすることに氣附くやうになり、(8)瞋恚の焰に身を焦がせし人も、忍辱の鏡を著て世の調和に努むるやうになり、(9)懈怠の人懶惰放逸にして何等努力の勵みなかりし人も、こゝに發憤興起して努力精進の人となつて生氣をもつて生まれ替つた働きをするのである、(10)散亂の者則ち心に確乎たる目的觀なくして心の動搖に惑はされ數々變じて何事も成らざるやうの人も、決定の心が出來て靜思沈着の風が備はり、立派な目的の光を認めて秩序よく進むやうになり、(11)愚痴多くして心の闇に閉ぢられ悲痛絕望の岸に立てる者には、智慧の光明を與へて平和喜悅の彼岸に到らしめ、(12)未だ彼を度する心なき者則ち化他の精神なくして社會的道德心を缺きたりし者には、社會的の道德心を起さしめて他のために盡し他をして平和喜悅の地に住まらしめんとして努力し、こゝに社會の向上進步に貢獻する人となり、(13)十惡を行ずる人、

則ち殺生、偷盜、邪婬、妄語、綺語、惡口、兩舌、貪、瞋、痴に迷へる人は、これ等の罪惡を去ることゝなり、(14)有爲を樂ふ者則ち一時的目前の事にのみ心牽かれて永久の事に心到らざる者をして、永遠不朽の事に心を注がしむるやうになり、(15)退心ありて事に當りて挫折する意志薄弱の人をして、剛健の氣を養ふて不退の心を得せしめてその目的を成し遂げしむるのである、(16)有漏を爲す者則ち人の智力を過大に見て之に醉ふて未來永遠の大事に心を寄せず實在の觀念なき者には、大反省を與へて實在の精神を喚び起し、而して不滅の大智見大功德に向つて心を用ゐしむるのである、(17)煩惱多くして正善の事を思考し作爲せんとするに、當りて、この思想行爲を攪乱せんとするが如き劣情は、之を抑へて能く理性と感情とを融和せしめ、以て人格の完成に達せしめるのである、この十七の、力、初め發心自覺より最後の煩惱除滅の人格完成に至るまでを、一括して第一の功德不思議の力と說いてある、この外に九種の功德不思議の力が說かれてあるから十功德品と云ふので、今は一功德のみより擧げないのである、一功德でさへも斯く十七種の活力があることを知るならば、經典が與ふる信仰を味識する時、如何に尊とき清新なる信仰が得らるゝかは、測り知り難きほどのことであります

このように信仰には道德的實踐の力を含んで居りますから、信仰の力が人生社會の光となるのであります、この信後の生活は如何に滿足の境界であるか、又如何に法喜の溢ふれてあるものか、又如何に活動努力の勇氣あるものか、又活動後の平和の生活は如何、之を上人の御一生に徵して見ますれば明白のことであります詳しくは述ぶる時間がありませぬから、上人が晩年活動を收めて身延に蹤接せられてありし時の消息、則ち活動後の平和の生活を窺ふためにその聖語を拜誦致します

此所をば身延の嶽と申す、駿河の國は南にあたり、彼の國の浮島がはらの海ぎはより、此の甲斐の國波木井の郷身延の嶽へは百餘里に及ぶ、餘の道の千里

よりもはづらはし、富士河と申す日本第一のはやき河北より南へ流れたり、此の河は東西は高山なり、谷深く、左右は大石にして高き屏風を立て並べたるがごとくなり、河の水は筒の中より强兵が矢を射出したるがごとし　此の河の左右の岸をわたり　或時は河はやく石多ければ舟破ぶれて微塵となる、かゝる所を過ぎゆきて一の瀧落ちたり、身延の瀧東は天子の嶺、南は鷹取の嶺、西は七面の嶺、北は身延の嶺なり、高き屏風を四つついたてたるがごとし、峰に上つてみれば草木森々たり、谷に下つてたづねれば大石連々たり、大狼の音山に充滿し、猴猴のなき、ごへ谷にひゞき、鹿のつまをこうる音あわれしく、蟬のひゞきかまびすし、春の花は夏に開き、秋の果は冬になる、たゞ〳〵見るものはやまかつがたきゝひろふすがた、時々とぶらふ人は昔なれし同法なり

（錄八一〇新尼抄）

誠に身延山の栖は、ちはやぶる神もめぐみをたれ天下りますらん、心なきしづの男しづの女までも心を留めぬべし、哀れを催はす秋の暮には草の庵に露深く、檜にすだくさゝがにの糸玉をつらぬき、峰の紅葉いつしか色深ふして、たゞ〳〵に傳ふ懸樋の水に影をうつせば、名にしれふ龍田川の水上もかくやと疑がはれぬ、又後ろには峨々たる深山そびへて梢に一乘の果を結び、下枝に鳴く蟬の音澁く、前には湯々たる流水湛へて實相眞如の月浮び無明深重の闇にれて法性の空に雲もなし

（錄八一〇身延記）

上人の信仰の前には、この人も通はぬ深山に孤棲し猴猴を伴として、草の庵に盡日無聊の生活を送くり給ふても、斯くも喜悅の心に滿ちて、檜端に傳ふ雫を見ては珠の連らなるが如、懸樋にうつる紅葉を見ては龍田川の仙境に在るが如感じ給ひて、現實娑婆の人世に理想淨土の風光を實驗し給ふのであつて、こゝに至りましては人生崇高の美も善も極まれるを見るべきであらう

上人の信仰を通ふして見る佛敎は、人道を開顯する俗諦開會主義である、信仰の滿足の上より來る活動主義

てある、喜悦感謝より來たる調和主義である佛性顯現の自我發展主義である、斯くて個人としては人格の完成を得せしめ、社會には調和的進歩を與ふるのてある この人生社會に與ふる効果と最後涅槃菩提の岸に到らしむる濟度とを併せて二世一貫の妙教と稱するのてあります、内に統一的の本佛ありて信仰の對象を定めしめ、外に人道開顯の妙義ありて、能く現當二世を利益するのて、之を佛教の統一的信仰と云ふのてあります

（完）

日什上人置文諷誦章講義（完結）

八十三老比丘　阪本日桓　講演

第三十一回

○七世ノ師恩生々ノ父母親疎ノ有緣過現ノ檀越普灑ニ法雨一同ニ成ス妙因一及以法界平等利益文　此の八句三十二字は總して有無の二緣の衆生に施與したる惣回向の文て有ます、此の文大に分つて兩段、初七世の下の六句廿四字は有緣の回向を明し、二に及以の下の二句八字は無緣の回向を明したる文て有ます、又た初の有緣の回向を明す文の中に更に分つて二つ、初の七世の下の四句十六字は所回向の人の衆類を擧げ、二に普灑の下の二句八字は衆類の人の得益を明し、次に無緣の回向を明したる文の中に更に分つて二つ、初の及以法界の一句四字は所回向の人を擧げ二に平等の利益の一句四字は得益を明したる文て有ます、已上分科是より隨文消釋します○七世文偖て此の七世の七の字大なる疑問て有ります、如何となれば父母は生々に有り師匠は七世に限ると云ふは佛道不通の論なり、七世以上は師匠なしとは何の經論に出てたるや不審し、又父母の恩は生々に有り師匠の恩は七世に限ると云ふも是れまた義に於て不通なり、さては此の七世の七の字は世の字の寫誤なる事は必定て有ます、下の句に生々の父母とあれば此の句は世々と有るべき事なり、世々の師恩生々の父母とあれば對句も至て宜しく、また七の字と世の字とは字の形頗る似て寫誤し易き字なり、依て老比丘は此の七の字は世の字の寫誤と見て世々の師恩と讀て穩當てあらうと思ひます

其所て師恩の師の字は、人に教ゆるに道を以てするを師と云ふと有りましてみちをしゑと讀む字て有ます、恩の字は、めぐむ、いつくしむ、あわれむと讀む字にて、師たる者は弟子をあわれみ、めぐみ、いつくしみて道を以て教へ三世教護の大恩があります、一字千金に値し一點多生を扶助する恩あり、故に師の恩は須彌山よりも高しと云ふ、弟子たる者肝膽を摧て報恩せねば成りません○生々父母文父母の大恩は言ふまてもなし、我等が此の色心を九ケ月の永き日月胎内に托し種々の勞苦に身を焦し心を惱め、胎外に出ては夜は懷に抱かれ數斛の乳味を費し、晝は父の膝に居て摩頂を蒙る事數年、其慈愛養育は頭のきり〳〵より足の爪先にいたるまて至らざるはなく、其恩は蒼溟海よりも深し子たる者夙夜怠たらず大恩を報せねばなりません。次に親疎有緣と申すは、親は六親眷屬及び朋友等て、疎は見聞知識の人を指したる者て有る、是等の人々は皆有緣の人々て有ます、又た次に過現檀越と云ふは、或人が言には死したる檀越を過去の檀越と申し、存生て居る檀越を現在の檀越と云ふ、よつて過現檀越とは書になつたのて有ると言はれて有る、此れは文を捌く事は巧者なれども義に於て害あり、如何となれば上の句に世々の師恩生々の父母とあれば、此をも上に準して過去の檀越現在の檀越と云ふべきは當然の事なり、何が故に此の句に限りて現在のみに約して釋したる哉、有の儘に文字を讀て過は過去なり現は現在なり、謂く過去に於て檀越となり財施等を以て外護し法師の弘法を扶助したる恩あれば必ず報せねばならぬ、現在も又た是の如くと見たならば實に穩當なる見方て有りませう。次に檀越とは梵漢兼稱して檀越と書きたるて有ます、具に書けば檀婆羅密と書くのて有ます、檀は梵語て此には譯して布施と申します、婆羅密は天竺の語て此方にて翻して度越と申します、謂く佛法僧の三寶へ布施したる功德に酬ては九界生死の大海を度越して、佛界涅槃の彼岸に到るが故に檀越と申します○普灑ニ法雨一文　此の一句四字は回向の文の中に於て能潤の教法を明したる文て有ます、其所て普とは普及とも普徧

とも申して一切に亘り一物も漏す事なき語て有ます、
経に普及於一切と說かれたるは是れて有ます、次に灑
とは灑汎とて水をそゝゞ事て有ます、次に法雨とは法
華經には二種の一大超過の大法雨が有ます、一部唯迹
の法華經には開權顯實の大法雨が有ます、是れは像法
時代の本己有善の衆生を潤す法雨て有ます、又た一部
唯本の法華經には開迹顯本の大法雨が有ます、是れは
末法今時の本未有善の衆生を潤す法雨て有ます、此の
諷誦章に御書になつた法雨は開迹顯本の法華經の法雨
て有ます○同ノ成二妙因一文 此の一句四字は回向の文の
中に於て所潤の人の得益を明したる文て有ます、偖て
同とは上に擧げたる世々の師匠、生々の父母過現の檀
越等の有縁の人々及以法界の無縁の衆生、彼此同等に
毫も偏頗なく法雨の利益を得るを同と申します、次に
成二妙因一文 此の文は省畧してお書になりたるて、具に
は成二妙因妙果一と書くべきて有るを、末法今時は下種
の因益を被ひるが正意なれば、一往正意に隨て因益を
擧て果益を省畧したるのて有ます、偖て妙因妙果と申
すは、一部唯迹の法華經には境智行位の妙因が有り三
法妙と申す妙果が有り、一部唯本の法華經には本因妙
と云ふ妙因が有り本果妙と云ふ妙果が有ります、此諷
誦章の妙因と申すは一部唯本の法華經所詮の本因妙を
指したて有ます、法華經本迹二門に亘りて自行の妙因
妙果と化他の能化所化と申す法門が有ます、他日別席
に於て辯明して聽せませう、然ば畧して本因本果二妙
の經文を擧て聽せませう、壽量品に得レ人二無上道一と
說きたるは本因妙て速二成就一佛身一と說きたるは本果
妙の文て、また神力品に於テ我滅度ノ後二應レ受二持ノ此ノ
經一と說きしは本因妙て是ノ人於二佛道一決定無レ有レ疑と
說きたるは本果妙の文て有ます、此等の經文の講義も
又た他日を俟つて辯じませう○及以法界平等利益文
此の二句八字の分科は上に辯じた通りて有ます、其所
て及以の二字はおよびとよみて是れより彼れに至るの
辭て有ます、此の有縁の人々より彼の法界の無縁の衆
生におよぼすゆへに及以とかきたるて有ます、乃至法
界とかきても此の乃至はおよびと讀みます、一二乃至

九十と書く乃至は越超の辭て中間の三四等の數を越超
したるて有ます、次に法界平等利益と有る法界とは十
法界の衆生の事て、平等とは偏頗のなき語て、利益と
は利潤を得と云ふ事て、謂く所尊の本尊と所信の經文
の大功德に酬て、十法界の有縁の人々及び無縁の衆生
が一味平等に妙因妙果の利益を被りたるを、及以法界
平等利益と御書遊したて有ます○便鳴二三下之少
鏡一式驚二三身之尊聞一仍諷誦ノ所請ノ如レ件ノ文 此の三句廿三字は諷誦一章の惣結の文て有ます
便ち鳴二三下之少鏡一文 此の一句七字は能鳴の器を擧げ
たる文て有ます、便の字はすなはちとよんてそこでと
いふ語になります、鳴二三下之少鏡一とは少鏡とあるは
疑しき文字て有ます、聲論に鞋撫は梵語此には磬と
も鐘とも翻すとあれば磬と鏡と音の通ずるを以て書き
たるものて有るか、但しは鐘と鏡と字形の相似たるを
以て寫誤したる者てあるか、兎も角も鐘を打ち鳴す
事て有ます、其所て三下と云ふは佛在世の時の鐘を打
ち鳴らす法規て有ます、初めは小聲に打ち鳴らし、次
には中聲に打ち鳴らし、終りには大聲に打ち鳴したる
を一下と云ふ、此の如く三度打ち鳴らすを三下と申し
ます、又たは三打とも三通とも申します、然るに釋尊
の滅後に天竺に闍膩吒王と云ふ大逆無道の惡王あつて
無辜の衆生を暴殺したる殺生罪によつて、死して千頭
の大魚となり刀鋸其身に纏ひ一頭を斫れば直ちに亦た
一頭を生じ、其苦痛の甚しきこと譬るに物なく、時に
一人の阿羅漢有りて僧侶の維那の役をなして鐘を打ち
鳴したり、闍膩吒王其鐘聲を聞く時には刀鋸虛空に飛
び去て頭を斫ること能はず暫時うの苦痛を脫れ其快樂
なること又た譬るに物なく、其時千頭王は鐘聲を聞て
劇苦を脫るゝ因緣は此の鐘にありと悟り、信を維那
の阿羅漢の方へ遣して長時間に打ち鳴すことを請求し
一七日鐘聲を聞きたりし功德によつて逆罪は霜露の日
光に照さるゝが如く忽ち消滅し拔苦與樂したる此の
因緣によつて、如來の滅後には鐘を長時に打ち鳴すの
て有ます、さて鐘を打ち鳴すに南山の行事抄に初め打
つ時には經論によつて心標を建べしとあれば、本宗に

於ても三下の心標を建つべき事て有る、其時は如何心標を建つべきて有るといふに、即ち次き下に式ァ驚ニ三身之尊聞ァとあれば三下に打つは三身を標示して打つべきて有る○式ァ驚ニ三身之尊聞ァ文式はもつてとよむ驚はれどろかすともれそれしむともよみます、是れは上の句に便ァ鳴ニ三下之少鏡ァと有るから式驚ニ三身之尊聞ァと對句して書きたるて有ます、佛を驚かし恐れしむる事は第六天の魔王てすら不可能のて有ます、況や少鏡を鳴して驚かし恐れしむるの理有らん哉、文字に封じられて義を害せぬよふにせねば成らぬのて有る此の意味は三身へ請願する文て便ち三下の少鏡を鳴し奏上して三身の尊聞に達し佛の御配慮を蒙り奉りたしと云ふ文の意味て有ます○仍ァ而諷誦ノ所レ請ァ如レ件ノ啓白文偖て諷誦の二字の講義は此の章の劈頭に辯じて聞せました、次に所レ請とは佛に請願し奉る所の旨趣と云ふ意味てある、其所て如レ件ノの件の字は設文に分也とあり、和訓に久多武とよみ、又た世語に文字の一行を一下り二行を二下りと申します、左すれば此の件の字は上みに所修の種々の法 所志の人々の事を細々に書き下し分けたるを如件と申すて有ます、又た敬白とは是れも上卷の講義の節に、三所敬白の所以と敬白の二字は辯じて聽せましたから略します○嘉慶二年八月廿一日文此の年號は吾か帝國人皇一百一代の皇帝後小松天皇の御宇の年號て歳ノ次ニ戊辰ニ年なり、開祖の御弟子日妙聖人の入寂は嘉慶元年八月廿七日て有ます然るに八月廿一日と有るは一周忌追善の大法會を一七日間御修行に成ました其初日に、此の諷誦章を御撰遊になりて御朗讀遊ばしたる故に廿一日の日附に御書になつたて有ます○大法主日什敬白文此の大法主の三字は担間法に約して辯ずると、出世間法に約して辯ずるとの二種の講義が有ります、先つ世間法に約して辯じますると、職原抄後附二十に、無位の僧は八位に當る、入位の僧は七位に當る、住位の僧は六位に當る、滿位の僧は四位に當る、大法師位の僧は三位已上に當るとあり、此の文によれば、吾が開祖聖人は二位僧都に任せられたれば大法師位て有る、故に大法主と御認めに

なつたて有ます、又た出世間に約して辯ずるに又た二種有ます、一には大法會供養の施主なれば大法主と御書になり、二には大法とは三大秘法なり主とは教主なり、謂く法華經本門壽量品所顯三大秘法能弘の教主なれば大法主と御書になつたで有ます○日什とは吾が開祖の御諱て有ます○敬白の二字は次き上に辯した通りて有ます。偖て本宗の秘書たる諷誦章も本席に於て無レ有ニ魔事一難レ有ニ魔及ヒ魔民一皆ァ護ニ佛法ァ潛りなく結講になりました（完結）

茂原講習會

子　老

千葉縣長生郡茂原町に於ける修養會發起に係る夏期講習會に臨席すべく、嚴師日生上人は本月二日茂原町へ飛錫せらるゝとゝなりたれば、聽講の爲め今成乾隨師は徒弟を從へて隨伴し、予も幸に隨行の光榮を得、二日未明より起き立ちて八ッ山まて徒行し夫より電車に乘りて南國に着し二番列車に搭じて午前十時すぎ茂原驛に達しぬ、ト見れば紅紫の玄題旗は高く停車場頭に翻翻たり、時にこの會合の幹事木村乾中師を始めとして發起人林、大多和、白井、宍倉等の諸子、石橋管事萩原、渡邊、雨布教師等第三教區の本宗各僧員、第四教區の森川管事、成島布教師、齊藤自正師等、來りて我が一行を迎接せられ、やがて修養會の本部たる林太喜一郎氏の邸に到り此處に一同休憩しぬ、是より先き修養會にては次の如き廣告箋を諸方に配附せりといふ

佛教講話會開催

佛教研究ノ目的ヲ以テ來ル八月二日ヨリ向フ壹週間茂原町尋常小學校ニ於テ顯本法華宗管長大僧正本多日生上人ヲ聘シ法華經講ニ付左ノ日割ヲ以テ講話會ヲ開ク

八月二日午後二時より　演說會
自八月三日至八月八日毎日午後一時より　講話

有志諸君ノ御來聽、希望ス傍聽無料ノコト
但シ入會希望ノ方ニハ二日會場ニ於テ會員幸相渡申ベシ
長生郡茂原町（乾燥場内）

修養會

發起人（イロハ順）

伊藤　七之亟　泉澤内藏之助　林　太喜一郎　富田　莊太夫
太田　謹三郎　大多和　來助　加藤　忠治　横堀　賢司
横堀　平藏　横堀　恒三郎　武田　音三郎　高山　四郎
永瀨　正之助　永瀨　久治　永野　靜夫　野崎　耳助
久我　善四郎　山田　精吾　山田　庫吉　足立　金次郎
白井　勇次郎　宍倉　藤一郎　日野　厚信　平川　數次
新田　重三郎　墨田　信三

かくて同日定刻に至りて會場茂原尋常小學校内に於て豫定の如く演說會は開かれぬ

開會の辭　白井勇次郎君

所感を述ぶ　　木村　乾中師

佛教の興立を望む所以　　本多　日生師

先づ白井君は修養會の趣意、佛教講話會開催の緣由、及び自己の所信に就いて、滔々一時間餘雄辯を振はる君は同地女學校長にて門下より多くの才媛淑女を出し又大成館中學に教鞭を執り、殊に多年熱心に佛教を研究しつゝある、謹厚博識の名士なりといふ、木村師は次て登壇所感を述べられ、夫より日生師の演說あり時に三時二十分、午後五時に至り閉會を告ぐ、聽衆約二百その十中八九は當時當町に開かれつゝある本郡教育會の講習會に出席せる教育家を以て充たさる、生師の演說は本誌の首に掲載するも、尙ほ局外觀として「新房總」の記事を次に掲げて參照に資せん

●本多管長の演說（二號活字）

白井勇次郎氏外有志廿六名の發起にかゝる修養會は八月二日より同八日まで佛教研究の目的を以て長生郡茂原町尋常小學校に於て顯本法華宗管長大僧正本多日生師を聘し講話會を開き二日は特に演說會として白井氏の挨拶及び日生師の「佛教の興隆を望む所以」と題せる一時間半に亘る高尙にして趣味ある演說あり聽衆約二百其要に曰く

吾邦人が古來佛教に付て抱ける思想は約三種となすべし、佛教は有害無益のものとする排佛論は其一なり、佛教は排するに當らず信ずるに足らずとする不問論は其二なり、これ然し乍ら甚幼稚の考へにして論するに足らず、由來文明は人格の完成なり、是に於て人格の完成に最も力ある佛教興さゞるべからずとする護法論は其三なり、而してこれ余が次に述べんとするものなり、余は眞理若しくは信仰の理論を措いて今や正面より佛教の價値を論せんとす。ヘルバルトは吾人の意思の後へには實踐觀念とも云ふべき知にもあらず意にもあらざる一種の氣分あることを說けり、此氣分は感情の一種にして實に道德の根元なり、されば釋迦は四諦を說くや常に先づ結果の善惡を示して直接に氣分に訴へて好惡を判せしめんとせり、余が今正面より佛教の價値論をなすの意亦茲にありと云ひ、問題を分ちて三となせり、即(一)佛教は世界文化に大關係あり(二)佛教は國家經營の完成上最大切也(三)個人生活の價値は佛教をおきて他にあるべからずと、而して此本問に入る前一言すべきは他にあらず彼の基督教徒等の云ふ如く佛教は決して死物にあらずして活物なり有機的生命を有するものなりとて、師は科學的に物質の活物なること世界に死物なきことを論じ、次て認識論的に將た純正哲學的に主觀客觀を說き、一轉して佛教は佛性と法界との間の關係を一切悟了するにあり即方便と眞實……不變の人格と外界に順應するものとの間の關係を敎ふるもの、故に佛教と云へば只原理、佛、及教への三つのみならずして、併せて佛性ある個人をも含む、故に又精神より精神に活きたる力として殘したるもの即ち活きたる作用を存續するものこれ佛教なりと云ふ

べし、已に然り故に吾只一人なりとも信仰あるものあらば佛教猶存すべし、況んや諸君あるをや、豈況んや世界人口の三分の一以上の信者あるをや、佛教何ぞ死せんやと其安を喝破し、いよ〳〵第一同に入り大涅槃經、龍樹、及び智者大師の說を引きて佛教とは畢竟衆人との連續を保つとなり、諸種の學亦人と關係なきはなし、故に佛教は如何なる學說とも關係あり此關係消滅せん日佛教初めて死するなりと說き、更に一轉して世に恐るべきもの他にあらず心內の爭鬪……即知見と欲求……智識と信仰……の爭鬪なり煩悶、懷疑、失望これがために起る、佛教は即ち二方面よりこれが慰藉の法、安心の方針を敎ふ、一は涅槃論即ち哲學的方面なり、他は佛陀論即ち之れ宗教的方面なり、即ち佛教は宗教にして哲學、哲學にして宗教なり、故に眞理即佛陀佛陀即眞理なれば、又佛陀を如來とも云ふなり、而して基督教に涅槃的方面なし、斯る知信相合致せる高遠なる一大宗教の衰頽はあゝそも誰の不幸ぞや、余は人類のため佛教の興隆を望むと云ひ、更に師は論理學、社會學、教育學、歷史、美術の諸方面より佛教の偉大なるを說き、凡ての學畢竟此佛教に歸着する旨を詳論し、第二問に移りて曰く國家の經營を完成せんとせば國家主義ならざるべからず、國家主義の根本は忠孝なり、此忠孝の道は儒教によりて教へられしと雖儒教の忠孝には根底なし、此根底を與へたるは即佛教の因緣說なり、敎へて曰く其國に生る既に國との間に因緣あり、忠孝さるべからずと、即ち忠君は初めて根底ある道德となれる也、其他社會問題……勞動者、貧富の懸隔問題等の如きも佛教に云ふ所、慈悲の心を持し互に其恩惠を感謝するを得ば根底より融和するを得べし、第三問は時間の都合により聽くことを得ざりは吾れ人共に殘念なりき。（白嶺子筆記）「以上八月四日發行新房總第二面の記事」

右演說了りて控所に於て發起人諸子の挨拶あり、中にも農學校長農學士加藤忠治君は宗教と家庭に就いて諄々日生師と對話あり、やがて黃昏に及び一行俥を馳せて今回の宿所に充てられたる二宮本鄕村山崎妙行寺に投じぬ

かくて講習會講話は「佛教の概要」と題して（廣告欄には法華經題とありしも、この題は專門的なるに由り、本題に改められる）三日より八日まで毎日二時間餘講演せられ、外に三十分間隨意の質議を許されぬ、蓋し今回の講演たる實に空前の大師子吼にて、本誌掲ゞる所の師の演說は即ちその序論とも見るべし、今便宜講演の章目を列記して未聞の篤志者に紹介せん

佛教の概要　　本多日生師　講述

第一章　佛教とは何ぞや

(一)　佛教とは佛陀が人類を濟度したまふ宗教なり

(二)　佛陀とは何ぞや

(1)　歷史の佛　　(2)　教理の佛

(三)　佛陀觀系統と涅槃觀系統

(四) 二系統の統一
(五) 人類中心の佛教
(六) 機根の不同
(七) 信法二行
(八) 二行の統一
(九) 佛教の源泉
(十) 三輪の妙化
(十一) 三種の教法
(十二) 三種の修行
(十三) 濟度の意義
第二章 研究の方法
(一) 歴史的研究と體系的研究
(二) 散漫主義(混同主義)
(三) 普通主義(折衷主義)
(四) 統一主義(批判的折衷主義)
(五) 現代の要求
第三章 教義の根底
(一) 統一的の宗教
(二) 統一的の濟度
(三) 統一的の教義
(四) 統一的の一法
(五) 諸法とは何ぞや
(六) 西洋哲學との對照
(七) 原始佛教に對する認見
第四章 涅槃論
(一) 涅槃論の過程
(二) 涅槃の語義
(三) 實相論
(1) 空觀說 (2) 假觀說
(3) 中觀說 (4) 完全說
(四) 緣起論
(1) 業感緣起 (2) 賴耶緣起
(3) 眞如緣起(性靈緣起 法界緣起) (4) 佛界緣起
第五章 佛陀論
(一) 四佛說の顯本
(二) 始本不二說の顯本
(三) 中心說の顯本
(1) 時間的中心論 (2) 空間的中心論
(3) 絕待的中心論
(四) 顯本說の充足教義
第六章 信仰論
(一) 信仰の意義
(二) 信仰の近因
(三) 信仰の對象
(四) 信後の生活
第七章 倫理論
(一) 總論
(二) 倫理の主義
(1) 開顯主義 (2) 活動主義
(3) 自我實現主義 (4) 調和主義

(二) 實踐の方面
第八章 結論

如斯體系的の大講話なりしかば、乏短なる期間に於て固より細密なる講說を聽くの餘裕なかりしとは、頗る惜しき思をなしたるも、而かも講師が能くその概要を提げて周到に論證講明せられたるには、聽講者一同深く感喜を催ほしたりき

來聽者は百有餘名に上り、爍くが如き炎天に日々遠きは片道五六里近きも一二里就れも暑熱を冒して參集し中には馬背を驅つて來るあり、自轉車を飛ばすあり、各學校男女教員多數を占め、他に地方の僧員信徒あり予等も亦勇を鼓して日中一里餘の道程を徒步して講莚に侍べりぬ、同人般舟の即吟に曰く

修養會即事　般舟道人

休道南總七里鄕　信仰落又地無望　這箇修養果何似
士女滿堂渴仰莊
日々相通一里程　路傍綠草恰如烹　忽消煩熱校堂裡
透堅氷厳卜生
温顏慈說校堂中　士女忽然忘事功　本佛三輪洪大化
放光毛孔十方通

又國風數首あり、

講話會の席上にてよめる　乾航

早して水はかれたる七里の、ちまたうるほす法の村雨

師の君は法の燈火かきあげて、まづ七里の闇は晴れゆく

般舟

七里の荒れたる野邊に等しくも、三草二木の法の村雨

七里はさびれてくるゝ入相に、光りかゞやくゆふつつの色

垂井重明(宮内省官吏)

おちこちにあつさをさけてあるく身は、すゝしきのりのみちもきくなり

さても講演は魔事なく八日を以て結講となり、即ち加藤農學校長は會員一同に代りて講師に感謝の意を演べられ、茲に全く閉會を告げて、一同茶話會を催しぬ、されど講師の一行は此日午後四時三十六分の發車にて歸山せらるべき豫定なりしかば、閉會を告ぐるや直ちに發起諸子並に本宗參列諸師に送られて茂原驛に馳せ付け趣味多き茶話會の清談に心殘して滿車に乘じ、且つ談じ且つ歎びつゝその夜十時を以て無事に踏房せらる

顧みれば往昔茂原の一信士たりし松本新左衛門久吉は信仰篤かりしかば師に就きて宗義を攻究し、後ち回國して法益を與へつゝ上洛して、遂に叡山の學匠と聞へし華王坊を詰り开が上慢の幟を倒し、その結果世に名高き天文法乱を惹起したるとは、吾が宗門史上の華と

して今に人口に膾炙する所、而して四百年後の今日彼れ松本に緣故深き此の茂原の地に於てかゝる神聖なる會合を催ほされたるは抑も何等の奇緣ぞや

於戲この七日間の虛空海會は、實に有益にして趣味あり、歡喜あり、滿足あり、光明あり、力ありける聖會なりき、感謝す、本會發起人諸子並に我が第三敎區諸師及び隨喜贊同の諸師、諸賢は玆に斯かる一大佛事を作して能く社會の爲め人類の爲めに貢献せられたるとを、庶希くは向後數々かゝる會合を催ほし、滋雨數々下りて遂に枯槁の群類を蘇活せしめられんことを、虔んで諸賢契の健在を祈る

雜報

●宗制中改正認可　本年四月臨時宗會にて議決せる宗制中改正の條項は、爾後其筋へ認可出願中の處本月中旬認可を得たり、その條項は宗令を以て發布せらるべし

●千葉縣大法會　本月十日千葉縣大網町蓮照寺に於て縣下各敎區聯合會を開き、本年度大法會等に就き會議の結果、來る十月二十四日より向ふ三日間（舊九月十八、九、二十日）第二敎區生實濱野村本行寺に於て大法會執行の事に決議し、僧都中村乾信師法會の總務たりといふ、尙ほ詳細は次號に報ずべし

●茂原講習會と道路布敎團　豫て報道せし千葉縣茂原町に於ける夏期講習會は、別掲同人所報の如く彌よ八月二日より八日まで一周間同地尋常小學校内に開催し、講師本多日生師は「佛敎の概要」と題し講演せらる、催主修養會の發起者は各學校長、敎職員、學士、銀行家、政治家、實業家等孰れも知名の人士にて、來聽者は同地敎育會講習の爲め來集せる敎育家九分を占め、第三敎區の編素は勿論第四敎區よりも來聽、頗る盛會にて敎益多大なりき

右講習會中八月五日は恰も鷲巢（八品派）鷲山寺の開山（日辨上人）會なりしかば、前日來遠近の老幼群參するを機として、本宗道路布敎團の萩原啓門、木村乾中、石橋端嚴、成島泰行、渡邊乾航、大川日敎等の諸師及び篤信家の一隊は早天より同所に出陣して正午過ぐるまで大法鼓を鳴せり、又去る七月十四日に茂原町にて萩原木村、成島等の諸師例の如く道路布敎を開きたる際も聽衆群集し大に識者の同情を得、今回講習會の催ほしもこの活動が慥に一の動機たりしといふ、右布敎團の諸師は毎月茂原町の市日を期して道路布敎を行ふといへば希くは縣下護法篤信の眞俗諸子も競ふて奮起一番以て七里法華の靈域を復活せられんとを

●京都通信　總本山妙滿寺に於て、去る七月拾八日夜、佛敎大演說會を開く、小生は開會の辭を述べ、西村治一郎君は『五戒論』と題して化學上より飲酒戒を說明せられ、野口義禪師は『容貌と人物』と題して東西兩洋の實例を引き巧妙に演說せられたれば滿堂の聽

衆非常に敎益を得たり、但遺憾なりしは、江羅直三郎君、鈴木孝碩、川崎英照、兩師も出演の筈なりしが時間の都合にて見合はせられたるとにてありき（伊藤秀治報）

●姫路立善婦人會　第十五敎區姫路市妙立寺及び妙善寺に於ては從來婦人團体の會合ありしも未だ會として組織せられざりしが、今回彌よ姫路立善婦人會として一の團体を組織し、妙立寺主權僧正野老乾爲師を會長とし、幹事には三宅六藏、中村祐七の兩氏、書記水野乾誠師にて、去る七月二十一日午後その發會式を擧げ、野老會長の講演あり、餘興には明治幼稚園の童子女の遊戯、中村乾事息女等の彈琴、菊川檢校の琴と黑田宗匠の尺八の合奏等あり、最後宗義に因める福引は滿場の大喝采を博し、一同歡を盡くし、夕景頃散會せるが、當日來賓として陸軍將校未亡人等來會總員二百五十餘名に達し頗る盛會なりき、爾後毎月一回會合して婦人に適切有益なる講演を開くといふ

○岡山通信　久々にて我岡山敎團の近狀御報申上候六月の篤信會は去る廿五日開催、聽衆堂に充ち中々盛況にて、辯士及演題は左の如くに御座候

先安生命更扶渡後　中川事顯
國民ト宗敎心　原田容廣
佛陀三輪ノ妙化　能仁事一

次て本月は昨廿日午後八時開會、今日此頃の酷暑尙聽衆二百を以て數へられ申候、演題及辯士は

自己ノ價値ヲ知レ　中川事顯
法華ノ妙用　原田容廣
信仰ノ寫象　能仁事一

閉會は十一時頃と覺ゆ申候

顯本法華宗岡山婦人會は本年一月發會後益々盛大に趣き居り申候、會員は既に百三十餘名の多きに達し會合日は毎月中の五日、弘通所にて有之候、能仁上人の宗祖聖人御一代の講話は本月は伊東配流のあたり迄進み申候、會員中有志を以て來月頃より朗讀會組織さるゝ樣承はり候、又同會は去月より本月にかけ醫師鈴木昌平氏に「ヒステリーノ原因及其療法」と申す演題にて二回の講話を依頼致し申候、何に致せ會員一同の熱心は非常のものなれば今後益々各方面に發展致すことゝ喜び申居候

次に日蓮研究會は目下規則の一部に修正を加へ講演の樣子も改むる等大改良の準備中なれば、定めし來る九月の新學期と共に目覺ましき活動を見る可くと存じ候（七月報顯月）

○和氣敎信　當地本成寺婦人會は益す盛況を加へ、會員月々增加して目下七十有餘名に達し、殊に暑中は普通衛生上の講話を加へて、意義ある信仰を養成し、會員外の有志者をも隨意參聽せしめ、頗る盛會にてありき

教學財團彙報

○今回本宗宗制中に宗門公共の事業に對し特殊の功勞あるものには、功勞章を授與する規定を設けられ、同時に功勞章制定及び授與に關する令達を發布せられたるが、由來教學財團の事業たる寔に宗家百年の大計なれば、已に本年五月發行の本誌上宗務廳錄事欄に掲げたる決議に基き、彌よ本財團基金勸募に盡力せる寺院住職へは、該勸募基金拂込額五分の二に達したる上成規を賦み夫々盡力の程度に應じ三級乃ての範圍内に於て昇級せしめられ、已に五分の一拂込結了の向へは、その二級昇等に相當する者へは二等功勞章、三級昇等相當者へは二等功勞章を不日管長より授與せらるゝ趣にて、目下功勞章調製中なりといふ、依て參考の爲め宗務當局者に於て最近調査に係る功勞章を授與せらるゝ寺院住職の氏名等を左に掲げん

府縣名	寺院	住職	級氏名	勸募額ニ對スル宗費年額ノ割合	昇級階數	功勞章
東京	本立寺	醫 都	井村恂也	一〇〇	三	二等
同	久成寺	大學統	田井日晃	六〇	一	二等
同	本染寺	權中學統	田久保日城	三一九	三	二等
同	妙國寺	大醫正	本多日生	一一三	一	二等
同	眞了院	中學統	久我默宗	五六	一	二等
神奈川	妙經寺	仝	小鹽智山	三四	一	二等
靜岡	妙隆寺	權中學統	櫛勵光	七三	三	二等
京都	善量寺	權學士	森義觀	五八	三	二等
同	信行寺	權中學統	木村日順	五一	三	二等

備考 ……は無住又は現住干與さざるもの
功勞章の等級を記入したるものは、五分の一拂込結了の分なり
千葉縣は目下勸募中に屬す

○教學財團に關する翼贊員名簿用紙、振替貯金用紙は從來請求に應じ其都度品川支所より配附せしが、目下總て拂底に付、今後名簿は適宜調製せられたく、又振替貯金用紙は最寄郵便局より受取られたし

但し參考の爲め左に總本山の振替貯金番號等を掲ぐ

○京都市にては去る七月中勸募着手の處、その成蹟頗る佳良なりといふ、實況は申込表參照あれ

口座番號　○第四參六九番

加入者住所氏名

京都市上京區榎木町　總本山妙滿寺

教學財團基金寄附申込表（第十回）（品川支所取扱）

金壹百圓　東京市淺草圓常寺檀家　清水佐太郎
金拾圓　鈴木　もと
金五圓　野木善之助
金五圓　鯨井　富藏
金貳拾五圓　荻原　國三
金五圓　吉川　半藏
金五圓　二木茂兵衛
仝　安盛寺々檀
金參百拾壹圓五拾錢　安盛寺　金貳拾五圓　川鍋金作
仝　慶印寺（前回報告の處誤脫あり更に掲ぐ）
金五百圓（第一回）檀家代表　總代（本橋利平　小川平右衛門　須田喜代松）
金五圓東京府品川町妙國寺檀家　鈴木仙太郎
金貳百圓　千葉縣本納町蓮福寺住職　齊藤顯一（白鳥開安）
金五拾圓　仝縣長生郡長柄村大正寺住職　白鳥開安
金四拾圓　仝縣山武郡白里村等覺寺住職　宮川光熙
金貳拾五圓　仝縣仝郡仝村本泰寺住職　京藤義應
金七圓　仝縣仝郡福岡村（妙慶寺住職本泉寺兼務住職）　伊藤智典
金貳拾五圓　福島縣二本松町蓮華寺住職　米良惠長
金參百圓　千葉縣千葉町　本圓寺檀家中
金壹百圓　仝縣山武郡源村本松寺檀家　猪野重之助
金拾圓　仝縣仝郡正氣村圓福寺檀家　家德邦次郎
金五圓（即納）仝縣仝郡土氣本郷村善勝寺檀家　吉原忠左衛門
金拾圓（即納）仝縣長生郡東郷村蓮成寺檀家　藤乘德治郎
金參圓　小川彦太郎　金拾圓　藤乘　勤錄
金貳圓　金貳圓　柄木　英德
仝縣仝郡關村本法寺檀家
金拾圓　河野　祥吉　金拾圓（仝寺屋人）三橋　ひめ
金五圓　大多和淺次郎　金五圓　大多和良八
仝縣山武郡豊成村蓮成寺檀家
金拾五圓　佐瀨清兵衛　金拾圓　佐瀨　仙吉
金七圓　遣田增太郎　金五圓　遣田　傳吉
仝縣君津郡法藏寺檀家

同　上行寺（發住醫都）　田上寬靜　一五〇　一
同　了圓寺（中學統）　吉田完亮　四四　二
大阪　蓮成寺（醫正）　清瀨貞雄　四八　一
同　堂閣寺（權中學統）　古谷養眞　一三八　三
同　妙滿寺……　草名玄饒　一一〇……
同　法華寺（中學統）　能仁歸明　五七　二　三等
同　圓乘寺（權醫都）　原田容廣　六二　二　三等
兵庫　妙善寺……　武聖麟　五六　一　三等
同　本成寺（中學統）　久成寺（權少學統）　能仁事一　三四　一
岡山　本行寺（權醫正）　梶木日種　四六　一
同　本蓮寺（中學統）　高田日暢　四六　二　二等
同　本經寺（權中學統）　牧田英長　二二八　三
同　本典寺（權少學統）　大橋日襲　一〇三　三
同　本照寺（權醫都）　島田顯恕　五九　一
廣島　妙詠寺（權大學統）　大森日綾　一〇三　三
同　妙福寺（學士補）　堤正音　一二〇　三
同　高源寺（權少學統）　天崎會温　八三　三
同　大德寺（學士補）　安田台城　三二　一
同　蓮華寺（學士）　吉田義寧　一〇二　三
山口　秋林寺（仝）　森田日靜　九四　三
同　了性院（權少學統）　朝倉俊達　一〇〇　三
同　妙蓮寺（中學統）　吉塚道榮　八三　三
福岡　本泰寺（學士）　……　一一三　三
福井　善勝寺……　……　八〇　……

金參圓　和田久吉　高野佐吉　竹治郎
金參圓　和田正作　榎本萬吉　加藤市藏
金參圓五拾錢　森清七　北川峯吉　加藤磯吉　高野猪次郎　水野圍藏
金貳圓　久保榮吉　京久保勝藏　林松次郎　吉田やす
金壹圓貳拾錢　山口德松　小笠原傳吉　鈴木重吉　鈴木善平　林安藏　竹内三次郎
金壹圓　渡邊勘次郎　竹之内安藏　關口元治郎　竹内孫七　國松
金壹圓五拾錢　高野又七　惣七　佐藤宗五郎
金壹百圓　本泰寺檀家中
金貳拾圓　高名甚五郎
金拾圓　山本良平
仝　伊藤千代吉
金五圓　中村新藏
仝　中村玄峻
金貳圓　中村福松
仝縣市原郡濕津村本泰寺檀家
金參拾圓　飛鋪恭平
金拾圓　山本禎治郎
仝　山本才次
仝　伊藤伊三郎
金五圓　志賀次三郎
金參圓　中村吉平
金貳圓　中村六太郎
金壹圓五拾錢　前田健治　山口八十吉　山口彌五郎　平野子之松
金壹圓　竹内長吉　石山吉次郎　竹内光太郎　竹藏　高野竹内源之助
仝　中村民次郎
仝　中村源藏
中村崎太郎
仝郡仝郡市東村林仙寺檀家
金五圓　大網源六郎
伊塙儀三郎
靜岡縣田方郡函南村妙高寺檀家
金拾圓　久保田才次郎
金五圓　渡邊仙之助
金五圓　神尾茂右衛門
仝　今井辰之助
金四圓　渡邊寶次
金四圓　芹澤常太郎
金參圓五拾錢　遠藤豐吉
金參圓(即納)　廣瀨由之助
金參圓　廣田嘉七郎
仝　久保田源藏
金參圓　今井善作
仝　青野豐作
仝　長島德次郎
仝　青野富藏
金貳圓五拾錢　伊藤榮次郎
金貳圓　梅原房五郎
仝　小林海次郎
仝　原菊次郎
仝　原萬助
仝　小林市三郎
仝　神尾休八
仝　松井喜三郎
仝　青野善吉
仝　石井彌兵衛
仝(即納)　瀧口清作
仝　渡邊倖一
金壹圓五拾錢　大庭忠兵衛
金壹圓　久保田房吉
仝　古川文次
仝　今井龜吉
金壹圓　高橋萬作
仝　今井多吉
仝　友野波次郎
仝　吉田榮助
仝　加藤寅藏
仝　遠藤馬之助
仝　青野常次郎

仝　今井幾太郎
仝　久保田釜太郎
仝(即納)　今井榮造
金五拾錢　杉山甚平
仝　石井せい
仝　小高繫矩
仝　石井佐兵衛
岡山縣赤磐郡周匝村久成寺檀家(初回)
金拾圓(住職武　聖麟)
金拾圓　高原百造
仝　難波辰次郎
金五圓　岩藤順四郎
仝　安藤音五郎
仝　南部孫太郎
金四圓　田中庄太郎
金參圓　橋本要藏
仝　高原鐵太郎
金貳圓五拾錢　高原安次郎
仝　高原秀次郎
金貳圓　下山馬市
仝　南部千代松
金壹圓五拾錢　河原彌吉
仝　下山爲造
仝　長濱房太郎
仝　長田佐和
仝　石井ちか
仝　久保田實五郎
金五拾錢　神尾定吉
仝　今井政吉
仝　今井藤造
仝　長島和平
仝　豐永寅藏
金參拾圓　岩藤茂登造
金拾圓　岩藤十郎二
金五圓　岩藤安太郎
仝　岩藤治太郎
仝　野上五郎平
仝　岩藤武八郎
仝　中務百太郎
金參圓　高原勇造
仝　岩藤福四郎
金貳圓五拾錢　高原穩三郎
金貳圓　河原八十吉
仝　高原稗造
金壹圓五拾錢　谷野利太郎
仝　土手砂五郎
仝　明石伊志
仝　村上伊佐三
金壹圓貳拾五錢　末高辰五郎
金壹圓(即納)　角南勝造
仝　阿部かね
金壹圓(仝)　下山和平
仝　難波敬次郎
仝　長濱喜平治
仝　福山芝太郎
仝　南部三十郎
仝　高原市郎治
仝　福山宗市
金四圓　岩藤勘三郎
金壹圓五拾錢　檜原濱造
山口縣都濃郡久保村秋林寺檀家(第二回)
金四拾圓　水本松二郎
金四圓　大木代吉
金貳圓　今地伊兵衛
金壹圓　河村源吉
仝　清水松二郎
仝　大木岩吉
金七拾五錢　藤原源次郎
仝　三好次郎
仝　山下菊治郎
金五拾錢　河村ヒデ
金參拾錢　大木金助
金貳拾圓　大木安十
金五拾錢　松村梅吉
金壹圓(即納)　野上うた
金壹圓　檜原桂次郎
仝　明石由和
仝　南部飛知
仝　影山隣造
仝　福山音次郎
仝　南部萬次郎
仝　南部岩次郎
金拾圓　安光峯太郎
金參圓　岩藤彦四郎
金五圓　河村文之進
金參圓(即納)　河野峯
金貳圓　濱崎久太郎
金壹圓　水本伊三郎
仝　岩崎シム
仝　桑島和一
金七拾五錢　松永嘉作
仝　手倉長藏
金五拾錢　今地太助
仝　松永忠吉
金拾錢　松永重吉
金壹圓貳拾五錢　桑島良助

金五百圓（豫約）京都總本山寺中　正行院　檀家中
金貳千圓（豫約）京都總本山、本山構中代表（瀧野喜八郎　吉川平兵衛　秋山嘉兵衛）

京都總本山寺中、成就院檀信徒

金壹百圓　西村總左衛門　金壹百圓　星野　保子
金參拾圓　大橋總右衛門　金參拾圓　富永東一郎
金貳拾圓　大橋松次郎　金拾圓　津崎太兵衛
金拾圓　中野岩次郎

仝

法光院檀家

金壹百圓　瀧野喜八郎　金壹百圓　米田善次郎
金五拾圓　倉富治三郎　金五拾圓　木崎音吉
金五拾圓　近津　すて　金參拾圓　内田丑太郎
金參拾圓　三宅　元吉　金參拾圓　三宅　かね
金拾圓　野村　妙經　金拾圓　柴田幸太郎
金拾圓　村岡　咲　金拾圓　村岡角太郎
金五圓　米田梅次郎　金五圓　木村　壽二
金五拾圓　京都市寂光寺檀家　新井　美喜

仝市上行寺檀家（第二回）

金壹百圓　秦　藏六　金壹百圓　樋口　孝道

仝市壽量寺檀家

金貳拾圓　入江治三郎　金拾圓　小島駒次郎
金拾圓　京都市現住（小川日豊徒弟）　三谷　會善
金拾圓　京都市上京區榎木町　吉澤嘉三郎
金拾圓　仝市　仝區　仝町　黒田虎三郎

金拾圓　仝市　仝區　仝町　桑原秀次郎
金拾圓　仝市　仝區　仝町　高島甚之助
金拾圓　仝市　仝區　仝町　宮崎力三郎
金拾圓　仝市　仝區　仝町　塚本　儀助
金拾圓　仝市　仝區　仝町　鵜野田彦太郎
金拾圓　仝市　仝區　仝町　下桐清三郎
金拾圓　仝市　仝區　仝町　内堀　彦七
金拾圓　仝市　仝區　仝町　千代間政次郎
金拾圓　仝市　仝區　仝町　岸上安之助
金拾圓（即納）仝市　仝區　仝町　小西德兵衛
金壹萬貳千疋（金參拾圓）京都市二條寺町妙滿寺前町　禰田淺次郎

（西松米三郎　岡本傳七　若林茂郎　高木仁兵衛　山中源兵衛）　（久保國之助　山田啓助　田中いと　山田直三郎　前川與兵衛）　（小泉新兵衛　三宅禮意　白波瀬季次郎　森直輔　森拾吉）

申込金額訂正　千葉縣館山町本蓮寺檀家申込の内（金五拾錢）を（金壹圓）に更訂の分左の如し

味岡　百藏　鈴木市之助　鈴木　和助　石渡　卯吉
秋山長之助　長田源之助　山岸　市藏　井上　權治
原田德太郎　澤野　榮助　（以上第七回申込表の分）　山根平五郎
山根　八平　山根　清次　小瀧由太郎
小瀧　惣助　岩撫助治郎　岩撫　仁平　小瀧　若松
岩撫　宜兄　岩撫　政吉（以上第九回申込表の分）　岩撫　吉藏

第一回申込表中、千葉縣折戸妙隆寺住職山本博潤（金貳拾五圓）を、仝寺住職として（金拾五圓）北之幸谷常、泉坊兼務住職として（金拾圓）寄附の事に訂正方申込ありたし

教學財團基金寄附受領表（第九回）

（京都本部取扱）

金四拾圓（初回）千葉縣山武郡片貝本隆寺住職藤崎道明
金貳拾圓（仝）東京市本郷區駒込顯本寺住職山崎日暲
金五圓（仝）靜岡縣庵原郡松野村妙松寺住職土屋賢正
金五拾錢（仝）仝　仝寺前住　田中　日仰
金拾錢（仝）仝　仝　仝寺中　山本　賢乘
金貳拾錢（仝）仝　仝　仝寺中　土屋　けい
金貳圓（仝）千葉縣長狹郡北塚法光寺住職佐瀨　体雅
金壹圓（初回）仝縣長生郡北塚善立寺兼務佐瀨　体雅
金五圓（完納）仝縣山武郡土氣善勝寺檀中吉原忠左衛門
金壹圓（初回）東京本郷區駒込顯本寺檀中　小原　邦愿
金貳圓　千葉縣山武郡松尾町妙國寺兼住　金阪　義昌
金貳圓　仝縣　仝郡　南郷村妙本寺住職　石上　敦俊
金貳圓　仝縣　仝郡　大平村妙隆寺住職　山本　博潤
金貳圓　仝縣　仝郡　仝村　圓壽寺住職　中村　通寛
金壹圓　仝縣　仝郡　仝村　妙榮寺　檀家　中
金壹圓　仝縣　仝郡　仝村　光泉寺　檀家　中
金五拾四圓　東京府品川町眞了院　檀家　中
金拾圓　千葉縣長生郡東郷村蓮成寺檀家　金貳圓（初回）　藤乘　勘蔵
金拾圓　藤乘德次郎

金六拾錢　小川彦太郎　金四拾錢　丙木　英德
金四拾圓　千葉縣山武郡大和村本福寺住職井村　悔也
金貳拾圓　東京市淺草慶印寺住職　山根　顯道
金參圓　仝市　仝寺中　山根　正枝
金拾圓　仝市　仝　寛受院住職　田島　義潤
金貳拾圓　仝市　牛込久成寺住職　田井　日晃
金貳拾圓　仝市　仝　仝寺　檀家　中
金貳拾圓　仝市　淺草常福寺住職　三上　義操
金貳拾四圓　仝市　仝　仝寺　檀家　中
金拾貳圓　仝市小石川本念寺住職　大須賀玄遊
金拾圓　仝市仝　仝寺　檀家　矢代太郎吉
金六圓　京都府北桑田郡知井村本妙寺住職左隈　禪喜
金參圓　靜岡縣田方郡函南村妙高寺住職木下　圓道

靜岡縣松野村妙松寺檀家（初回）

金壹圓　佐野龜作　金參拾錢宛　望月由太郎　沼田千代吉
金貳拾錢　望月彦作　金拾五錢宛　望月德藏
蓮池福太郎　宇佐美久太郎　金拾錢宛　宇佐美米吉
蓮池米藏　松下金太郎　中島幸平　佐野文吉　篠原定兵衛
蓮池啓藏　佐野熊太郎　松下幸作　小澤茂三郎
松下彌十　松下吉松　宇佐美乙吉　金參圓　天野傳作
金五拾錢宛　宇佐美芳松　佐野戸三郎　金參拾錢宛
田中金作　佐野萬吉　天野貞次　吉田鐵右衛門　宇佐
美長吉　金貳拾錢宛　佐野平十　田中弘一　金拾五錢
宛佐野彦七　宇佐美佐十　吉田幸作　蓮池長五郎　佐
野幾太郎　風岡作次郎　蓮池菊次郎　松下喜助　金拾

錢宛　杉山茂作　佐野吉之亟　佐野常吉　宇佐美熊十
望月長作　佐野馬吉　佐野安吉　佐野喜右衛門　佐野
喜三郎　小林清作　宇佐美助次右衛門　天野幸作　吉
田濱太郎　安藤正吉　宇佐美忠次郎　小林惣吉　金壹
圓(完納)天野寅十　金六錢　佐野丑松　金五拾錢宛
宇佐美台吉　宇佐美幸作　金拾錢宛　鈴木國太郎　風
岡助右衛門　宇佐美惣太郎　小川長七　朝比奈たき
望月文作　宇佐美市藏　金六錢宛　望月喜重　小澤源
太郎　小林常兵衛　朝比奈庄次郎　齊藤房吉　蓮池常
次郎　佐野延太郎　田中佐十　天野和吉　小林和助
宇佐美治作　金參錢　鈴木とく　金壹圓宛　田中秀穂
田中貞吉　金五拾錢宛　白井多作　白井
百太郎　白井繁太郎　金參拾錢　田中龜太郎　金貳拾
五錢宛　深澤由太郎　深澤瀧十　吉田豊太郎　金貳拾
錢宛　田中市松　鹽川久太郎　田中連作　白井治平
金拾五錢　深澤茂作　金拾錢宛　深澤彌十　深澤梅吉
石川米吉　石川梅吉　石川千代吉　天野角吉　久保田
繁[illegible]郎　石川惣七　金六錢宛　石川源吉　朝比奈富太
郎　鹽川德藏　宇佐美傳四郎　宇佐美國三郎　望月金
作　田中平次郎　西海增次　天野菊太郎　吉田喜作
田野下藤吉　望月米吉　丸山龜太郎　金壹圓宛　小川
友次郎　宇佐美千代吉　金五拾錢宛　小川京作　小川
源十　金貳拾五錢宛　石川德太郎　朝比奈吉太郎　朝
比奈松藏　金貳拾錢宛　深澤廣吉　渡邊彦太郎　金拾
五錢宛　望月國太郎　小川幾太郎　木內清作　木內鄉

三郎　大島鐵太郎　高岡幸作　仝松次郎
仝運作　小川喜一　金拾錢宛　小川國太郎　石川吉太郎
次郎　朝比奈伊三郎　杉原源七　渡邊與作　宇佐美角
作金六錢宛　錦織もん　川原虎吉　佐野治郎
小川安太郎　天野梅吉　仝源吉　深澤稱藏
純作　望月國藏　仝重吉　朝比奈豊吉　長田濱吉　木內
清作　望月源作　仝桑次郎　石川桑吉　小川
高岡きみ　石川松次郎　佐野善助　金三錢宛　宇佐美猪吉
宛　佐野七兵衛　天野茂十　金拾錢宛　望月幸吉　稲葉力藏　金壹圓　高岡久作
錢　稲葉茂三郎　桐山庄作　金四拾錢宛　齊藤松五郎　古庄藏　金壹圓　高岡格太郎　宇佐美鉞藏　小池平四郎　久保田喜十郎　渡邊彦次郎　宇佐美幸作　仝右衛門　仝久七郎　仝小池文吉　仝金拾錢宛　仝天野千代吉　仝久作　仝久保田子之作　仝乙吉　仝長左衛門　仝兵衛　仝宇田長左衛門　仝佐美梅吉　仝高岡乙吉　仝金貳拾錢宛　仝久保田金吉　仝石衛門　仝久保田金吉　仝稲葉
金五圓(初回)　京都寺町二條法光院檀家米田善次郎
金參圓(仝)　仝同　倉富治三郎
金四圓(仝)　仝同　三宅元吉
金壹圓(仝)　仝千本五辻壽量寺檀家入江治三郎
(仝)　仝小島駒次郎
京都寺町二條妙滿寺前町一統
金拾圓(完納)福田淺次郎　金貳圓宛(完納)西松米三郎
岡本傳七　仝若林茂一郎　高木仁兵衛　山中喜兵衛
久保國之助　仝山田啓助　田中いと　山田直三郎　前川
與兵衛　小泉新兵衛　三宅藏意　白波瀨季次郎
輔　森拾吉　森直

(三法堂目印)

●木像頭子　●金佛具

木像大販賣

佛具表具の元祖
各宗御寺院御入
用品一切何にて
も多少に限不御
注文御付らるべ
し佛書は申すに
不及御肖像書專
門
木魚位牌卸小賣

小包條例附郵券四錢

三法堂諸品發賣目錄(正價付)

佛具佛像位牌木魚其種類品有之候を以て
佛書表具一々記載する能はず依て特に佛書正價附發賣
目錄書を作製致置候に付御入用の諸君は郵券四錢御送
付被下候はゝ迅速進呈仕候此の目錄御用ゐなれば寺
院樣方の御入用品一切の買物何程遠方でも座ながら安
價にて買はれ升其の正札附の品は左の通り

注意

●佛書具一切●過去帳の類●大般若經●一切經●理趣分●位牌●太鼓●佛具金物一切●釣鐘●半鐘●木魚●拂子●曲錄●香●球數●天蓋●幡●扉子●中啓●雲洞●鉦●金鐘類●引打數●ゼ幡●唐幡●人天蓋●樂器●三施餓鬼幡●岸模●木像●厨子●木筆●經机●莫子●盤●鐘●行鉢●應量器●自鉢●類●三寶●並に桃平●硯●駄箱●硯●茶毫器●莫子●盤●鐘●行鉢●應量器●自鉢●器●高圓●盛物●盤●寶具●燈●線香●香具類●正價にして●板●製裝文庫●靈具●燈●線香●香具類●正價にして

各宗御本山御表具師
京都小橋三條通中島町西入
三法堂藤田總治
三法堂陳列所
大佛師
東入下ル

基礎金領收報告

千葉縣千葉郡白井村中野　伊藤惣藏

一金壹圓也
右本園基礎金中へ寄贈相成正に領收候也
明治四十年八月　一園

千葉縣下各教區寺院住職諸師に御依頼
各寺院の檀信徒中、現に當千葉町並に附近に移住せる
人々の中には、本宗寺院の所在を知らざる爲め、一時
假りに日蓮宗の寺院を頼み候人有之哉に聞及び候、右
は信仰上固より不都合の儀に有之、旁々甚だ御手數に
候へ共、此際各寺院に於て、檀信徒中當地並に附近に
現住する向の氏名住所御調査の上、當寺へ御報道被下
度右依頼申上候
八月　千葉町本町本覺寺住職　廣部永眞

廣告

自分儀是迄顯正と稱し來りしが、今回其筋の認可を
得、日虔と改名仕候間此段辱知諸賢に謹告仕候
七月一日　千葉縣長生郡二宮本郷村　秋葉日虔
　　同名　本原寺住職

腦脊髓
精神病

帝國腦病院

東京市神田區和泉町
(電話下谷七一七番)

院長ドクトル齋藤紀一明治卅三年專門學研究の爲め獨逸へ留學卅六年同大學卒業尚進て英佛專門病院を視察
兩院にて診察す

精神病　專門

青山病院

東京市青山南町
(電話新橋三六四五番)

統一

第百五十一號

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可（毎月一回）
明治四十年九月十五日發行統一第百五十號（十五日）

發行人 井村寅吉
印刷人 [illegible]

發行所 東京淺草區[illegible]町[illegible]（振替貯金口座[illegible]）統一團